

道徳判断の統計的研究とその検討

坂 田 一

I 研究の目的

道徳行為は規範としての意識、自律、責任という知的なものによつて導かれて行為として現わされるものであるが、その際判断という知性の働

きが重要な契機をなすものと考えられる。徳育は、知性の発達の上から経験を手がかりとして、道徳的価値判断の規範をひき出し、新しい事態に対してこの規範を適用して、新しい判断を行う能力を発達せしめることを有力な指導方法の一つとしていることはいうまでもない。もちろん行動規範として意識されてもそれが行為に移されることを阻んでいる心理的な事情が介在している。特に青年の場合、その持つ内心の矛盾性もあつたり、外部的権威の不信から内界への自律に強く依拠する傾向が強いので、成人のもつ道徳観とはかなりのずれが見出されるにちがいない。しかし普通にいわれている分別 *Good sense* が徳育の重要な要素として取り上げられ、如何なる成長段階にあつてもその啓培に努力を払うべきであることはいうまでもない。

殊に青年が成人をのりこえて新しい進歩をもつて新しい道徳を創造す

べき使命をもつべきものであるとすると、われわれはそのよき協力者であらねばならない。そこに補導者としての高い立場が要請されるのである。そのためには彼等の道徳性に関して科学的に行動傾向性を把握しておくことが求められる。

この調査は現代青年との間に横わる断層へのかけはしを得ようとの意図から生まれた一つの試みである。(補導会議で観念的な立場、自然主義的な立場、合理主義的な立場その他が対立して、その調整に困る場合があるという現実の要請もこの調査の動機となつた。)

この調査研究においては、現代青年(高校生)の道徳行為における価値判断を、質問紙法による統計的処理によつて辿り、その診断と問題の所在を索めることを目的とした。

II 調査の方法

まず田中寛一博士がダンラップ(Dunlap)などの試みた調査様式を参考として日本人に適するように作成し、大正一四年二月初旬に山梨県下の中等学校生徒約七、〇〇〇名に実施した一〇〇の質問項目を骨子と

して、現代の青年の様相や時代の推移を勘案して加除補正して計八〇問とした。これは調査の目的を、現代の青年の問題点をとらえることと併せて、田中博士の調査実施の頃の青年との比較を試みようとしたためである。

(注) 田中博士の調査項目をそのまま採用したものは一〇〇問中五〇問で、他に四問は修正を加えた(例えば「みだりに外国のまねをして日本の国体

を無視するような行をすること」を⑤に、「まだ独立していない人が父母の許可を得ないで勝手に結婚すること」を④のように改めた。)また現代で特に問題になりそうな項目を加えたし(例えば③、⑤、⑥、⑦など)、一方類似の項目や今のセンスとずれていると思われる問題(例えば「命がけで軍隊を救出するような仕事をする事」、「要塞地の地図を外国人に売ること」、「父母の意に反して国難に赴くこと」)を省略した。

(1) 調査実施期

昭和二八年一二月中旬

(2) 調査対象

京都市内外の一〇高等学校の生徒に、出身地域と学校種別から考慮して一応サンプルとなるように考えて実施した。

全日制高校

洛 北 (一般地区)	男子九六名	女子五六名
伏 見 (一般地区)	男子八四名	女子二九名
洛 陽 (工業地区)	男子七五名	女子五九名
朱 雀 (商業地区)	男子八〇名	女子四二名
桂 (兼業農家地区)	男子五四名	女子四二名
北桑田 (農林地区)	男子九一名	女子 八名

定時制高校

洛 北	男子八五名	女子三二名
堀 川	男子七七名	女子四七名
北桑田	男子一八名	女子四三名

通信教育制高校

朱 雀	男子九七名	女子三八名
計	男子七五八名	女子三九六名

総計 一、一五四名

(注) 調査対象は普通コースを主とした。

(3) 質問の様式

学 年 男 女 (何れか一方を○でかこんで下さい)

- 1 下記の80問題の各々に「印」の欄のところに善いと思うものには○印を、悪いと思うものには×印を、どちらでもないと思うものには△印をつけなさい。
- 2 次に、善いと思うものには「点」の欄に、10点満点のうち適当な点をつけて下さい。(例えば3点だけ善いと思うものには3点を、10点だけ善いと思うものには10点をつけるというように)
- 3 次に悪いと思うものには「点」の欄に10点満点のうち適当な点をつけて下さい。(例えば2点だけ悪いと思うものには2点を、8点だけ悪いと思うものには8点をつけるというように)

	印	点		印	点
1 規則正しい生活をする事			21 他人の欠点を嘲笑しないこと		
2 自分のした悪いことをかくすこと			22 電車や汽車の中で老人に席をゆずること		
3 家名をあげるために日常の仕事に精出すこと			23 名誉も報酬も得られないが世の人のためになる仕事をまじめにすること		
4 父母から意見されたとき、よけいな世話をやくといつて立腹すること			24 公共の建物を傷つけること		
5 自分より優れた人種と考えるものに対しては卑屈であるのに劣つた者であると思うものに対しては非常にいばること			25 伝染病をかくしておくこと		
6 ひとのことを陰で悪くいうこと			26 日本の事情をよく知らない外国人が日本の習慣に反するようなことをしたとき大目に見て許してやること		
7 良い結果に対する功名は皆自分の上に人に歸するのにその仕事に全力をつくすこと			27 見本よりも粗悪な品物を外国に輸出すること		
8 ひとから打明けられた秘密を他人に知らせないこと			28 他人に迷惑をかけるかもしれないと思つて自分の好きな楽しみをやめること		
9 汽車のレールの上に大きな石をのせてあるのを見てこれを取除くこと			29 釣銭を余計に受け取つたときだまつていること		
10 実際より税金を少く納めようとして収入をごまかすこと			30 貧乏で困っている親類があるとき自分の貯金を出して来て貸してやること		
11 汽車や電車のただのりをする事			31 従兄より借りた金を返さぬこと		
12 自分は戦争そのものに不賛成であるが日本が外国から侵略されるときは国のために自分の全力をつくすこと			32 心配があるのにもかかわらず他人に対して快活であること		
13 自分の利益のために国家の安寧を害するような説をととなえること			33 弟や妹が他人にいじめられたとき立腹してそのいじめた人を打つこと		
14 毎日適当な運動をして身体を鍛練すること			34 社会の人達のために進んで共同募金の街頭に立つこと		
15 試験で不正をすること			35 公の図書館の書物に鉛筆で印をつけること		
16 親を安楽にさせるために自分がたいそうしたいことも思い止まること			36 授業料などを納めないで自分の小遣に使つてしまうこと		
17 祖父母を馬鹿にすること			37 学校の行事に積極的なること		
18 自分の悪いことをすつばぬくと言つた人を殺すこと			38 友達の本や参考書を盗んで自分のものにしてしまうこと		
19 お金を人にやつて代議士に当選すること			39 生徒会(自治会)などできまつたことは自分としては反対であつてもそれに従うこと		
20 友人全部の決議したことでもそれを悪いと知つて自分だけが反対すること			40 身分相応の生活をする事		
			41 自分の学問や技術のよくできること又は所有物について自慢すること		

	印	点		印	点
42 友人と結んだ約束を守ること			68 顔役を利用して自分の利益を図ること		
43 自分の友人と他人とが仲のよいのをねたむこと			69 自分だけが見つかつて叱られたとき他人もしているということ		
44 親の反対があつても好きな異性と交際すること			70 天皇制を新しい時代にあうように考え直すこと		
45 すすんで教室や便所をきれいに掃除すること			71 知らない先生にはおじぎをしないでおくこと		
46 定められた学校の規則に従うこと			72 世界平和はわれわれとはかけはなれた問題として無関心であること		
47 自分でしなければならないことを人にしてもらふこと			73 散歩を禁じてあるのに公園の芝生を歩くこと		
48 悪口をいわれたりひどい目にあわされても正しい理由をいい通すこと			74 人にへりくだる精神を養うこと		
49 兄弟喧嘩 ^{ケンカ} をすること			75 親が間違つたことをしようとするときこれをとめること		
50 蔭 ^{カゲ} でものをいわないで自分の意見をどしどしのべること			76 ある外国のことは何でもよく、ある外国のことは何でも悪いと始めから定めてかかること		
51 野球には熱心であるがあまり勉強しないこと			77 代々の祖先の祭をよく行うこと		
52 異性の生徒とはげまし合つて勉強すること			78 召使のものをいたわること		
53 喧嘩の仲裁をして友人を仲よくさせること			79 国の政治が正しく行われるようにたえず政治に関心を持つこと		
54 未成年であるのにタバコを喫つたり酒を飲んだりすること			80 立派な科学の研究をして国の名誉を高めること		
55 先生が悪いことをしていると世間に言いふらすこと					
56 自分がしたことが悪かつたことを知つて目下の者にあやまること					
57 予習復習をまじめにすること					
58 教室や廊下に紙屑を散らしたりツバを吐いたりすること					
59 他人の感情を害することを恐れて嘘をつくこと					
60 時事問題や社会問題に関心をもつこと					
61 授業時間中まじめに学習しないこと					
62 選挙のとき自分の党派に関係なく最適任者を投票すること					
63 病人や貧乏人を助けるために銀行から金を盗むこと					
64 外国人に対して礼儀正しくすること					
65 みだりに外国のまねをして日本の風俗習慣を殆ど無視するような行いをする					
66 置忘れてあるものを誰も見ていなかったら拾つて歸つて自分のものにすること					
67 諸外国の事情をできるだけ理解するように努めること					

八〇問は個人・家族・社会・国家・国際の五領域に分れ、各領域とも

平均値の算定

$$\bar{X} = \frac{\sum X}{N}$$

積極、消極的両行為各々同数に分れている。

(第1表)

表1 積極、消極及び領域別項目番号

	積極的 行為	消極的 行為
A 個人	1, 14, 40, 50, 52, 56, 57,	2, 15, 36, 41, 51, 54, 61,
B 家族	3, 16, 30, 75, 77, 78,	4, 17, 31, 33, 44, 49,
C 社会	7, 8, 9, 20, 21, 22, 23, 28, 32, 34, 37, 39, 42, 45, 46, 48, 53, 60, 62, 74,	6, 10, 11, 18, 24, 25, 29, 35, 38, 43, 47, 55, 58, 59, 63, 66, 68, 69, 71, 73,
D 国家	12, 70, 79, 80,	13, 19, 27, 65,
E 国際	26, 64, 67,	5, 72, 76,

Ⅲ 結果の整理

(1) 評価の方法

田中博士と同じく二段階に分けて評価せしめたのであるが、統計処理としては

$\left. \begin{array}{l} -10 \\ -9 \\ -8 \end{array} \right\} -9$
 $\left. \begin{array}{l} -7 \\ -6 \\ -5 \end{array} \right\} -6$
 $\left. \begin{array}{l} -4 \\ -3 \\ -2 \\ -1 \end{array} \right\} -3$
 $\left. \begin{array}{l} 0 \\ 1 \end{array} \right\} 0$
 $\left. \begin{array}{l} +1 \\ +2 \\ +3 \\ +4 \end{array} \right\} +3$
 $\left. \begin{array}{l} +5 \\ +6 \\ +7 \end{array} \right\} +6$
 $\left. \begin{array}{l} +8 \\ +9 \\ +10 \end{array} \right\} +9$

の七段階とした。(点数を過大視する傾向があるので、一から四までは一段階とした。)

道徳判断の統計的研究とその検討

(2) 評点平均と不定範囲の比較

(注) 段階点を生の点数にかえたのは、-10から+10までの21段階の点数として整理したかったのと、田中博士の結果との比較のためを考慮したからである。

第2表にみられるように、平均値と不定範囲のそれぞれの列位は大体一致している。即ち積極、消極両行為共に正と負がはり合っているものほど、不定範囲(ゼロ反応)わからない、どちらでもない)も高い頻数を示して不安定な状態に置かれている。特に顕著なのは、家族意識が不定範囲の四位までを占め(③、⑦、④、⑩)著しく低位なこと、意見の対立していることを示している。

(3) 規範別平均について

前記の田中博士による五領域とは別に道徳行為を、自己、対人、対家族、対集団(学園、社会(成員)、対公共性(社会(公衆)、国家、国際)の八規範の類別を行って整理した。これは前記の五領域の分類が、心理学的にみて概念規定として便宜的なものであるからである。

(註) 対集団の社会(成員)は、自分がその構成メンバーとして自我に主体をおいて位置づけをした場合
対公共性の社会(公衆)は超個人的社会主観に立つて(抽象的な一般概念を主として)、集団に対した場合

その規範別の平均を第4、5表によつてみると、自己の評価が最も高く、対公共性の社会(公衆)と国際がこれに次ぎ、以下対人、対公共性

表2 項目別平均点と不定範囲の列位

列位	項目	規類 範別	平均 値	不定範囲の 順序と%	順序	項目	規類 範別	平均 値	不定範囲の 順序と%	順序	項目	規類 範別	平均 値	不定範囲の 順序と%	順序	項目	規類 範別	平均 値	不定範囲の 順序と%
1	1 (+)	a	8.30	78.5 (2.6)	21	57 (+)	a	7.03	47 (8.7)	41	13 (-)	e2	6.34	38 (11.1)	61	12 (+)	e2	4.42	18 (20.7)
2	14 (+)	a	7.94	78.5 (2.6)	22	46 (+)	d1	6.93	61.5 (6.6)	42	35 (-)	e1	6.27	56 (7.0)	62	32 (+)	d2	4.32	15 (22.9)
3	9 (+)	e1	7.80	72 (4.3)	23	53 (+)	d2	6.87	45 (9.0)	43	65 (-)	e2	6.26	35.5 (11.8)	63	62 (+)	e1	4.31	20 (19.6)
4	38 (-)	d2	7.69	80 (1.8)	24	60 (+)	e1	6.74	34 (12.8)	44	63 (-)	d2	6.25	40 (10.1)	64	39 (+)	d2	4.19	29 (15.4)
5.5	25 (-)	e1	7.64	74 (3.4)	25	15 (-)	a	6.73	63.5 (6.3)	45	68 (-)	d2	6.23	39 (10.6)	65	69 (-)	d2	4.07	17 (21.9)
5.5	19 (-)	d2	7.64	65 (5.1)	26	11 (-)	e1	6.72	61.5 (6.6)	46	21 (+)	b	6.21	59.5 (6.7)	66	49 (-)	c	3.96	11.5 (24.6)
7	18 (-)	b	7.52	69 (4.7)	27	72 (-)	e3	6.71	58 (6.8)	47	52 (+)	d1	6.00	25 (16.7)	67	7 (+)	d2	3.88	6 (27.8)
8	27 (-)	e3	7.49	73 (3.8)	28.5	54 (-)	a	6.69	53.5 (7.2)	48	29 (-)	d2	5.85	51 (7.7)	68	51 (-)	a	3.87	13 (24.0)
9	24 (-)	e1	7.38	77 (2.8)	28.5	76 (-)	e3	6.69	49 (8.0)	49	4 (-)	c	5.53	32 (14.0)	69	55 (-)	d1	3.77	9 (25.9)
10	5 (-)	e3	7.36	52 (7.5)	30	45 (+)	e1	6.67	43 (9.4)	50	47 (-)	d2	5.51	37 (11.7)	70	71 (-)	d1	3.72	8 (25.9)
11	58 (-)	e1	7.33	75 (3.1)	31	31 (-)	c	6.66	63.5 (6.3)	51	37 (+)	d1	5.50	24 (16.8)	71	33 (-)	c	3.70	16 (22.8)
12	50 (+)	d2	7.30	69 (4.7)	32	2 (-)	d2	6.65	55 (7.1)	52	43 (-)	b	5.42	30.5 (15.1)	72	70 (+)	e2	3.24	5 (31.3)
13	48 (+)	d2	7.29	59.5 (6.7)	33	66 (-)	d2	6.56	53.5 (7.2)	53	34 (+)	d2	5.37	22 (17.1)	73	20 (+)	d2	2.77	30.5 (15.1)
14	22 (+)	d2	7.25	66.5 (5.5)	34	80 (+)	e2	6.51	33 (13.1)	54	8 (+)	b	5.29	23 (17.1)	74	77 (+)	c	2.74	2 (40.3)
15.5	42 (+)	b	7.21	69 (4.7)	35	56 (+)	b	6.50	42 (9.5)	55	30 (+)	c	5.26	19 (19.7)	75	16 (+)	c	2.27	4 (3.50)
15.5	17 (-)	c	7.21	71 (4.6)	36	23 (+)	d2	6.49	41 (10.0)	56	59 (-)	b	5.20	27 (15.7)	76	28 (+)	d2	1.65	10 (2.51)
17	36 (-)	d1	7.13	76 (3.0)	37.5	75 (+)	c	6.44	49 (8.0)	57	10 (-)	d2	4.93	26 (16.1)	77	3 (+)	c	1.64	1 (41.1)
18	79 (+)	e2	7.12	45 (9.0)	37.5	73 (-)	e1	6.44	57 (6.9)	58	64 (+)	e3	4.92	14 (23.4)	78	44 (-)	c	0.98	3 (36.3)
19	6 (-)	b	7.06	66.5 (5.5)	39	61 (-)	a	6.39	49 (8.0)	59	41 (-)	d2	4.81	28 (15.6)	79	26 (+)	e3	0.33	7 (26.3)
20	67 (+)	e3	7.05	45 (9.0)	40	78 (+)	c	6.35	35.5 (11.8)	60	40 (+)	d2	4.60	21 (17.8)	80	74 (+)	d2	2.75	11.5 (24.6)

備考 (+) 積極的行為, (-) 消極的行為

不定範囲は%の多い順による 規範類別の符号は第3表による。

表3 規範別項目番号

規 範 別		項 目 番 号	計
自	己 (a)	1, 14, 15, 51, 54, 57, 61,	7
対	人 (b)	6, 8, 18, 21, 42, 43, 56, 59	8
対	家族 (c)	3, 4, 16, 17, 30, 31, 33, 44, 49, 75, 77, 78	12
対 集 団	学 園 (d1)	36, 37, 46, 52, 55, 71	6
	社 会 (成員) (d2)	2, 7, 10, 19, 20, 22, 23, 28, 29, 32, 34, 38, 39, 40, 41, 47, 48, 50, 53, 63, 66, 68, 69, 74,	24
対 公 共 性	社 会 (公衆) (e1)	9, 11, 24, 25, 35, 45, 58, 60, 62, 73,	10
	国 家 (e2)	12, 13, 65, 70, 79, 80,	6
	国 際 (e3)	5, 26, 27, 64, 67, 72, 76,	7

道徳判断の統計的研究とその検討

表4 規範別平均値

自 己 対 人 対	1	8.30	家 族	30	5.26	対 集 団 (社会—成員)	66	6.56	共 性 (社会—公衆)	60	6.74
	14	7.94		49	3.96		23	6.49		11	6.72
	57	7.03		33	3.70		63	6.25		45	6.67
	15	6.73		77	2.74		68	6.23		73	6.44
	54	6.69		16	2.27		29	5.85		35	6.27
	61	6.39		3	1.64		47	5.51		62	4.31
	51	3.87×		44	0.98		34	5.37		A V	6.73
	A V	7.18		A V	4.39		10	4.93			
	18	7.52	対 集 団 (学園)	36	7.13		41	4.81	対 公 共 性 (国家)	79	7.12
	42	7.21		46	6.93		40	4.60		80	6.51
	6	7.06		52	6.00		32	4.32		13	6.34
	56	6.50		37	5.50		39	4.19		65	6.26
	21	6.21		55	3.77		69	4.07		12	4.42
	43	5.42		71	3.72		7	3.88		70	3.24
	8	5.29		A V	5.50		20	2.77		A V	5.65
	59	5.20		38	7.69	対 公 共 性 (国際)	28	1.65		27	7.49
	A V	6.30		19	7.64		74	- 2.75×		5	7.36
	17	7.21		50	7.30		A V	5.57		67	7.05
	31	6.66		48	7.29		9	7.80		72	6.71
	75	6.44		22	7.25		25	7.64		76	6.69
	78	6.35		53	6.87		24	7.38		64	4.92
	4	5.53		2	6.65		58	7.33		26	- 0.33×
										A V	6.70

×印は整理から省略

の国家、対集団の社会（成員）及び学園、ずつと下つて対家族の順となつてゐる。しかし各規範における項目の少ない場合は一部の頻数の多少によつて影響を受けることは見のがすことができない。

（注） 平均値の極端にずれている場合は整理から除外した。

(4) 各規範内の内容について

各行為を規範別の列位（第4表）その他から全般的に内容を検討する。

個人規範では全般的に道徳規準もはつきりしてゐて、生活一般の基準をなすものとして一応妥当な線が出てゐる。その表現は、積極的である（①④⑥）が高位で、⑤⑧の消極的行為が平均値として高くして悪として拒斥はされても低い位置を占めてゐる。）

対人的には一応予想通りの結果といえよう。対家族規範は異性との恋愛も自分の責任で自律的に解決しようとし（④）、血縁に対する連帯感（弱まり⑥）、家名、家の誇りという倫理性がさして重い位置づけを持たないのは顕著な傾向である（③、⑦）。一般に家庭に関する問題は現代のようにその閉鎖性を破られた過渡期にあつて、青年にとり一定の道徳規範を生み出すまでに至らず、多くの悩みの原因となつてゐることは、「③規範別平均について」の結果でもはつきりしてゐるように顕著な傾向である。

対集団のうち学園生活では、尊師という觀念とほど遠く⑥、先生に対しても世人に対する場合と一様な態度がうかがわれる⑤。

対集団の社会（成員）の場合の行動では、上位の各項目は、生活上の周辺に横わる身近かな倫理的行為としてはつきり自覚されてゐることを示す。ところで下位を占めるものでは、謙譲は非民主的精神として極度に拒斥され、封建的な隷従からの解放希求がみられ④、現代青年の個人

主義的な自我本位なものの考え方を強く反映し、利己的な氣持が露呈されてゐる②⑦。⑦は民主的精神の解釈からしての平等觀と、個人主義的、功利的な考え方との複雑な感情の現われであろう。⑧⑩では古い道徳觀念との、また③④では感情表現のずれがうかがわれる。

対公共性の社会（公衆）においては、通念としての倫理的な規範の知的理解は一応持たれてゐるとみなされる。

対国家行動では、公正な政治に対する関心度の高いことを示してゐる⑩。⑫については自衛という問題に対する現代青年の意識がうかがわれる。⑭は問題それ自体にあまりない点があつた。

国際規範では、国際関係の平等⑤、国際理解の意欲⑫、また平和の希求が強くみられる⑭。一方外国人がわが国の生活秩序に反する行為をなした場合を極度に嫌悪してゐるのは、駐留軍の影響ではあるまいか②⑥。

(5) 男女の相関及び性差

女子は男子に比べて積極、消極兩行為ともに高い価を与へてゐる。そして男女の相関は第5表の通りである。これを Spearman の列位差法で相関係数をみると、積極的行為では $\rho = 0.947$ 、消極的行為では $\rho = 0.891$ と共に頗る高い相関を示してゐる。

男女の列位がかなりずれてゐるものを挙げると、積極的行為で男が高いのは⑨、⑫、⑬で、女が高いのは⑧、⑭である。また消極的行為で男が高いのは③⑥、⑦⑩、②で、女が高いのは⑤、⑥、⑪、⑬、⑭などである。即ち政治、社会問題では男が女より関心度の高いこと、また友人との約束を男の方が守ることを示し、猫ババ、ただのり、釣銭ごまかしは男が図々しいという結果が出てゐるし、召使いをいたわるとか清掃につ

表6 性差について χ^2 検定の結果

積極的行為									
序	項目	χ^2	列位%		9	75	18.23	$m \leq f$	$m < f$
1	57	58.32	$m < f$	$m < f$	10	32	16.65	$m \leq f$	$m < f$
2	8	51.57	$m < f$	$m < f$	11	62	15.13	$m \geq f$	$m < f$
3	45	39.14	$m < f$	$m < f$	12	34	14.22	$m = f$	$m < f$
4	1	33.26	$m = f$	$m < f$	13	50	12.06	$m \geq f$	$m < f$
5	46	33.18	$m = f$	$m < f$	14	22	10.85	$m < f$	$m < f$
6	56	32.73	$m < f$	$m < f$	15	48	10.23	$m \leq f$	$m < f$
7	78	30.33	$m < f$	$m < f$	16	21	10.22	$m \geq f$	$m < f$
8	40	20.90	$m < f$	$m < f$	17	53	8.23	$m \geq f$	$m < f$
消極的行為									
序	項目	χ^2	列位%		16	41	21.89	$m \geq f$	$m < f$
1	63	37.30	$m < f$	$m < f$	17	47	21.23	$m \leq f$	$m < f$
2	58	36.59	$m < f$	$m < f$	18	5	21.07	$m < f$	$m < f$
3	33	36.04	$m < f$	$m < f$	19	18	20.44	$m \leq f$	$m < f$
4	29	31.13	$m < f$	$m < f$	20	51	18.70	$m > f$	$m < f$
5	71	30.96	$m \leq f$	$m < f$	21	61	17.88	$m > f$	$m < f$
6	66	30.50	$m < f$	$m < f$	22	10	17.01	$m < f$	$m < f$
7	15	29.15	$m > f$	$m < f$	23	24	16.66	$m = f$	$m < f$
8	35	27.98	$m < f$	$m < f$	24	44	14.03	$m = f$	$m < f$
9	31	26.16	$m < f$	$m < f$	25	6	12.83	$m < f$	$m < f$
10	11	25.83	$m < f$	$m < f$	26	76	10.11	$m > f$	$m < f$
11	73	25.11	$m < f$	$m < f$	27	25	9.81	$m > f$	$m < f$
12	38	24.39	$m \leq f$	$m < f$	28	4	9.68	$m \leq f$	$m < f$
13	2	22.80	$m > f$	$m < f$	29	19	8.48	$m > f$	$m < f$
14	36	22.47	$m > f$	$m < f$	30	55	7.25	$m \geq f$	$m < f$
15	54	22.20	$m \geq f$	$m < f$	31	72	6.70	$m < f$	$m < f$

表5 男女列位の比較表

積極的行為			消極的行為		
項目番号	男列位	女列位	項目番号	男列位	女列位
1	1	1	25	1	6
14	2	3	19	2	5
9	3	2	38	3	2
42	4	10	27	4	8
50	5	6	18	5	4
79	6	15	24	6	7
48	7	5	36	7	17
67	8	13.5	17	8	11
22	9	4	58	9	3
46	10	11	5	10	1
53	11	12	6	11	9
60	12	18	76	12	22
57	13	8	2	13	23
80	14	19	15	14	19
45	15	7	54	15	18
23	16	17	72	16	14
56	17	13.5	61	17	26
75	18	16	11	18	10
21	19	20	31	19	13
52	20	22	65	20	27
78	21	9	66	21	12
37	22	23	13	22	24
30	23	25	73	23	16
34	24	24	68	24	25
64	25	27	35	25	20
8	26	21	63	26	15
12	27	32	43	27	31
62	28	30	29	28	21
40	29	26	59	29	32
32	30	28	4	30	28.5
39	31	29	47	31	28.5
7	32	31	41	32	33
70	33	33	10	33	30
20	34	36	69	34	35
77	35	34	49	35	37
16	36	35	51	36	39
3	37	38	55	37	38
28	38	37	71	38	36
26	39	39	33	39	34
74	40	40	44	40	40

いては女はやはり男より高くなっている。次に不定範囲について頻数の列位によつて相関をみると、これまた $r = 0.926$ となつて著るしく高い。そして男が女より格段の高位を占めているものは、⑬、⑮、⑤④、⑧、③③、④⑧、②②、④⑦で、女が高位にあるのは⑨、⑦⑦、⑤③、②①、⑥⑦、④⑧、①②である。この結果によつて、その項目の性格その他からみて男の方が善にも悪にも強いことがわかれる。即ちカンニング、喫煙、飲酒などの法度も男は女よりルーズであり、弱者を救うため銀行強盗をすること、弟妹のしかえしなど女より積極的である。しかし老人に席をゆずることでは女より低くなっている。一方女が不安定なのは、国際理解、自衛戦争かの問題などで、また対人的に他人の欠点を嘲笑しないこと、悪口をいわれても正しいことはつらぬき通すことでも女の方が男より判断の去就を決しかねている。

(注) 列位の低位なものは、評点が密集していて列位だけで判断することにはむりがあるように思うが、一応の参考として挙げた。

また χ^2 検定の結果、1%レベルで有意差のあるものについて配列したのが第6表である。

(注) 性差及び次の(6)学校種差の有意差の χ^2 検定は、上記のように評点が著るしく偏っているので、原則として積極的行為では+6に対して+5の以下を、消極的行為では-6に対して-5の以上をそれぞれ一括して ± 5 の分割の χ^2 テストによつて行つた。なお不定範囲(0点)は平均値の場合と同様にオミットすることにした。

この結果によると男女によつて山の偏りがかなり異なっていることがうかがわれる。

(6) 学校種差について

表7 学校種差について検定の結果

全日制と定時制間の検定

		積極的行為			
		序	項目	χ^2	%の大小
男	1	3	10.22	全<定	+6→
	2	60	7.43	全>定	
女	1	37	7.58	全>定	
		消極的行為			
		序	項目	χ^2	%の大小
男	1	49	10.06	全<定	
	2	17	9.39	全<定	
	3	61	8.31	全<定	
女	1	33	20.35	全<定	
	2	25	7.20	全<定	

全日制と通信教育制間の検定

		積極的行為				消極的行為			
		序	項目	χ^2	%の大小	序	項目	χ^2	%の大小
男	1	45	14.87	全<通		1	49	27.68	全<通
	2	64	13.72	全<通		2	29	17.06	全<通
	3	16	11.98	全<通	+→6	3	66	10.77	全<通
	4	34	9.77	全<通		4	73	10.53	全<通
	5	35	8.94	全<通		5	33	8.37	全<通
	6	77	8.78	全<通		6	63	8.25	全<通
	7	40	8.33	全<通					
	8	53	7.06	全<通					
女						1	49	10.88	全<通
						2	29	7.90	全<通
						3	55	6.70	全<通

備考 1%level

全日制と定時制、全日制と通信教育制間の χ^2 検定の結果(第7表)と判断の正の部分と負の部分の全体の比率で検討すると、全日制と定時制では、定時制の女子が学校の行事への関心が薄いことを示していること以

表8 田中博士の結果と比較

	男 子			女 子		
	本 調 査		田 中	本 調 査		田 中
	項目	順序	順序	項目	順序	順序
A +	1	1	3	1	1	2
	14	2	1	14	2	4
	57	4	4	○57	4	1
	○56	5	2	○56	5	3
	40	7	5	40	7	7
A -	2	2	3	15	3	1
	15	3	1	2	4	2
	41	6	8	41	6	5
B +	○78	2	7	○78	1	6
	30	3	5	30	3	3
	77	4	3	77	4	5
	○16	5	2	○16	5	2
	3	6	4	3	6	4
B -	17	1	1	17	1	1
	31	2	4	31	2	5
	4	3	2	4	3	2
	49	4	6	33	4	9
	33	5	9	49	5	7
	○44	6	5	○44	6	3
C +	○9	1	6	○9	1	5
	○42	2	13	○22	2	11
	48	3	4	48	3	3
	○22	4	11	○42	5	16
	○53	6	17	○53	7	15
	○23	9	1	○23	8	1
	○21	10	23	○21	10	24
	8	13	16	8	11	13
	○62	14	2	32	14	20
	32	15	21	○62	16	4
	○7	17	5	○7	17	6

	男 子			女 子		
	本 調 査		田 中	本 調 査		田 中
	項目	順序	順序	項目	順序	順序
	○20	18	8	○20	18	12
	28	19	24	28	19	21
	○74	20	7	○74	20	17
C -	○25	1	8	○58	2	18
	18	3	1	18	3	1
	○24	4	11	25	4	5
	○58	5	23	○24	5	11
	○6	6	14	○6	6	19
	○11	7	16	○11	7	14
	○73	9	19	○63	9	21
	○35	11	22	○73	10	20
	○63	12	24	○35	11	24
	43	13	20	29	12	13
	29	14	12	○10	15	9
	59	15	21	43	16	22
	○10	17	9	59	17	23
D +	○12	3	1	○12	3	1
D -	○19	1	6	○19	1	6
	○27	2	5	○27	2	5
	65	3	4	13	3	2
E +	13	4	3	65	4	4
	64	2	2	64	2	2
E -	○26	3	3	○26	3	3
	5	1	2	5	1	2

備 考

A個人 B家族 C社会 D国家 E国際

○印はずれの大きなもの

外にとりあげて理由づけられるほどの特徴を見出し得ないが、全日制と通信教育制とは、後者が一般に成人的な反応を多く示している。例えば身分相応の生活をする^{④⑩}に対して、通信教育制は肯定的であるが、全日制は寧ろ反撥的である。

(7) 田中博士の調査結果との比較

田中寛一博士の調査との比較を、同調査の領域別様式によつて列位からみて比較する(第8表)。

(A) 個人に関する行為において、特にめだつてゐるのは積極的行為中の^{⑤⑥}で、悪行を目下の者にあやまるという大らかさが薄らいてゐる。

(B) 家族に関する行為については、積極的行為では^⑩と^⑨において明らかに^④がいを示している。^⑩は前記のように、家庭内の自主性、自律の觀念から派生した考え方でもあり、また経済生活の余裕のなさを示すものであろうし、^⑨は田中博士の結果が最下位であるのに対して、この調査が高いのは、民主的精神の現われとみなされるのではあるまいか。また消極的行為では^{④⑥}で^④がいが見られるが、両親が絶対の権力をもつてすべてを統御していた時代にくらべて個人的意識の解放を要求してゐる端的なあらわれであらう。

(C) 社会に対する行為として、積極的行為中、この調査の序列が田中博士のそれに比してかなり上位にあるのは、^{⑤③}、^{②②}、^{②①}で、^{⑤③}では頗る平和的であり、^{②①}では他人のことを容喙しない氣風がみられる。^{②②}の序列が高いことは実情に照して寧ろ逆であらうが、知つていても實際行動に移すのを障げる何ものがあるからであらう。一方この調査が低いのは、^⑦、^{⑥②}、^{②③}、^{②④}と、また男子の^{④⑧}とあつて、^⑦、^{②③}は上記の如く、

謙虚であるとか、世のため蔭の力となるような氣持が薄らいてゐることをはつきり示し、^{⑥②}はその時の政界の動きによつて判断すべきであらう。^{②④}は問題の性格がいまいであつたようである。^{②⑧}は両調査共に低位にある。また消極的行為で、^{⑤⑧}、^⑥、^{①①}、^{②④}、^{②③}、^{⑤⑤}、^{⑥③}、そして男子の^{②⑤}が高いのは、交通^{①①}、公衆衛生^{⑤⑤}、その他^{②④}、^{②⑤}において公衆道徳は觀念としては一応知的に意識されてゐることを示すとみてよいであらう。一方低いのは税金^{②④}で、これは現代では通念化してゐるせいであらう。

(D) 国家に関する行為としては、積極的行為では、^{①②}が両者共に四問で、一位が三位となつてゐるのは、自衛よりも戦争否定の意識が上廻つてゐることを示すであらうが、大正年代ほどはつきりわられてゐないようである。もつとも田中博士の場合でも「父母の意に反して国難に赴くこと」は最下位となつていて、戦時中の意識からみると対立的意味で相通ずるものがあるようである。また消極的行為では^{①⑨}、^{②⑦}が高く、^{②⑦}では国際的に国家の名誉に対する自覚の高まりを、^{①⑨}では選挙に対する態度が健全になりつつあるものといえよう。

(E) 国際関係の行為では、特に注目されるのは^{②⑥}で、これは田中博士の場合と同じく三問中第三位であるが、この調査におけるほど顕著な結果となつてゐないので、前記のように外国軍隊の駐留下にあるわが国の青少年の特殊な心情の現われであらう。

IV 結果のまとめ

以上の結果をまとめると概略次のようになる。

- (1) 平均値と不定範囲(0点)のそれぞれの列位は大体一致している。
(評点が正と負ではありあつてゐるもの程、不明とかわからないというものが多い。)
- (2) 八規範に類別した場合、自己の評価が最も高く、社会(公衆)と国
際がこれに次ぎ、対人、国家、対社会(成員)、学園の順となつていて、
対家族規範がずっと低位にある。
- (3) 列位その他から全般的に内容を検討すると、個人規範では道德規準
もはつきりしてゐて、その表現は外向的、積極的である。対家族規範は
個人主義的、自律的で、血縁に対する連帶感が弱まり、家名、家の誇り
という倫理性が薄らいでゐるのは顕著な傾向である。対学園では師長の
いわゆる權威を重く見てゐない。対社会規範の成員としての場合には、
個人主義的で、謙虚な態度は否定されてゐる。一方対社会の一般規範と
しての知的理解は一応持たれてゐるようである。対国家では公正な政治
に対する関心は強い。国際規範では、一般に国際平等の立場でその相互
理解につとめたいという態度だが、わが国の生活秩序に反する行為は極
度に嫌惡してゐる。
- (4) 男女の相関は頗る高く、男女によつて品等のカーブの偏りがかなり
異なつてゐて、一般に女子は積極、消極両行為共に強調する傾向があ
る。また善惡共に男の方が積極的な行為を高く評価してゐる傾向があ
る。
- (5) 学校種差で、全日制と定時制では、定時制の女子が学校の行事への
関心が薄いことぐらいが特徴としてあげられるし、全日制と通信教育制
とでは後者が成人に近い反応を多く示してゐる。

- (6) 田中博士の調査との比較では、時代の様相において類似がうかがわ
れるが、一方ずれもかなりあつて、家族については極度に自己中心的と
なつてゐるし、社会に対してもやはり個人主義的で、謙讓とか、陰徳と
かの気持は薄らいでゐるが、通念としての公徳心は高まつてゐる。国家
に対しては自衛と戦争否定とのジレンマがはつきり出でゐるし、国際問
題としては国際平等、国際理解の意図は強いが、現実の示す様相に対し
ては憤りを感じてゐる。
- (7) 以上一般的にみて規範としての道德判断として極度に不合理なもの
はないようで、個人主義的道德の基調に則つてゐて、自我の自覚に伴う
独立の要求が強く見られるが、青年期の慣習、權威に対する反撥も現わ
れてゐる。また種々の矛盾や不安定性もうかがわれる。時代相の反映と
して、利己的、功利的、現実的で、殊に家族意識としては血縁觀念が極
度に薄らいでゐる。

V 方法の検討

- (1) 領域別及び規範別の評価の平均値は各々の項目数と、性質によつて
変動するので、一般的な解釈に止まるように思われる。
- (2) この調査の項目で、問題が具体的な場合には評点が高くなる傾向が
あつて、質的な吟味が必要である。
- (3) 評価の段階は、この調査では田中博士のそれに準ずるため多くした
が、その数は少なくしてよく、その数は研究を要するであろう。
- (4) なお規範分類とか範疇の広がり、群相互間の相関など検討を要する
多くが残されてゐるのであろうし、内容的にみても、青年を対象とする

場合この種の一斉調査では情緒的な反抗的反應があるにちがいないので、その秘密性と併せて考慮しなければならぬであろう。

(5) この調査のとつた統計的処理では、問題青年の、Lewin のいわゆる「表明された感情の背後にある motivation は表面に出て来ない場合が多い」ように思う。しかしだからといってこの種の調査も全体的な展望、可能性の予診には役立つにちがいない。

(注) 第一九回日本心理学大会のシンポジウムでもこの意見は是認された。

VI 今後の展開

- (1) 道德判断に現われたフラストレーションの要因、その行動傾向、及び適応機制による解消を精神衛生、臨床心理学的に究明する。
- (2) 集団特性との關係を検討する。
- (3) 問題となる項目（例えば意見がはつきりしていながら対立して不明確なもの）についてはホームルームの時間などを利用して討議せしめて feed back による追究が試みらるべきである。
- (4) この調査の諸結果からしてガイダンスの方策を樹立する。

〔附記〕この研究にあたつて資料を得るために惜しみなき尽力を頂いた各高等学校の先生方、及び溫き御示教を賜つた京大矢田部、佐藤両教授をはじめ諸先生に心からの謝意を捧げる。

参 考 文 献

- 1 牛島 義友「道德意識の発達」青年心理講座一 昭三〇 金子書房
- 2 沢田 慶輔「道德性の発達と教育」現代道德講座六 昭三〇 河出書房

- 3 青木誠四郎「道德性の発達と教育」 昭二八 朝倉書店
- 4 関 計夫「子供の道德教育」 昭二九 慶応通信
- 5 守屋 光雄「道德性と価値感の形成」教育心理学講座四 昭二八 金子書房
- 6 真仁田 昭「青年期の道德意識」東京学芸大教研「道德教育」 昭二八 学芸図書
- 7 大平 勝馬「道德教育の評価」 昭二九 関西道德教育研究会
- 7 伏見高等学校「高校生実態調査報告」 昭三〇
- 8 小見山栄一「モラルと人格形成」青年心理Ⅰ・3
- 10 岩田 茂樹「青年集団におけるモラルの発生」青年心理Ⅰ・3
- 11 「青年の道德教育」(シンポジウム) 青年心理Ⅱ・4
- 12 牛島 義友「牛島青年心理学」 昭二九 光文社
- 13 教師養成研究会「青年心理学」 昭二八 学芸図書
- 14 木村 俊夫「青年心理学」 昭二九 世界書院
- 15 佐藤正・間宮武「青年心理ノート」 昭二八 牧書店
- 16 細田 恒夫「道德と教育」新倫理学講座Ⅱ 昭二七 創文社
- 17 古川 哲史「道德」心理学講座12Ⅳ 昭二八 中山書店
- 18 思想「道德をめぐる諸問題」No. 371 昭三〇、五
- 19 理想「新しい道德教育」No. 227 昭二八、四
- 20 理想「教育と道德」No. 261 昭三〇、二
- 21 Spranger, E.: Zur Psychologie des Jugendalters. 1925. (邦訳 土井竹治訳「青年の心理」昭一一 刀江書院)
- 22 Landis, P. H.: Adolescence and Youth. 1947.
- 23 Brown, F. J.: Educational Sociology. 1947. (邦訳 西本三十二訳 教育社会学上巻 昭二六 朝倉書店)
- 24 Cole, L.: Psychology of Adolescence. 1952.
- 25 Symonds, P.M.: The Dynamics of Human Adjustment. 1946.
- 26 Hurlock, E.B.: Adolescent Development. 1949.
- 27 Piaget, J.: The Moral Judgment of the Child. 1932.
- 28 Burt, C.: The Young Delinquent. 1925.

63 Hartshorne, H. and May, M.A.:
Studies in Deceit
Studies in Service and Self-control
Studies in the Organization of Character, 1928~30.

66 Pressy and Robinson: Psychology of the New Education.
163 Havelighurst, R. J. and Taba, H.: Adolescent Character and Personality.
63 Vernon, P. E.: Personality Tests and Assessments. 1953.
63 Newcomb, T.M.: Social Psychology. 1950.